

第2回メコン地域ワークショップ開催

2月15—17日、本プロジェクトの最大の行事である、第2回メコン地域ワークショップをバンコク近郊のナコンパトム県で開催しました。参加者はカンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムからの参加者、タイのMDTメンバー、BATWCの職員、JICA関係者、オブザーバー、など合計80名を超えました。



プティパット副局長

プログラム構成は2日間のワークショップと最終日の視察の3日間でした。

ワークショップは、プティパット社会開発福祉局副局長による歓迎の言葉で幕を開け、続いてサワニーBATWC 部長による今回のテーマである「中央と地方のMDTの連携」に関する基調プレゼンテーションが行われました。タイでは中央レベル、地方8箇所、国際と三層からなるMOU(覚書)が結ばれており、さらに各県に人身取引防止センターが設置されています。他に、1300というホットラインが全国どこからでも24時間通報を受け付け、それは各県にある短期シェルターにつながる仕組みになっています。このような縦横に張り巡らされたメカニズムを活用しながら中央と地方MDTの連携により被害者保護が行われていることが説明されました。

その後の各国報告は、まずタイから行われ、パヤオ県の社会開発人間の安全保障省県事務所のナンタナーさんが報告しました。パヤオ県は、被害者を多く送り出している県ですが、県、郡、村レベルでMDTが活動しており、中央および近隣県のMDTと連携しながら防止活動や社会復帰活動を行っている事例を挙げながら話されました。続

いて、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムからの報告が行われ、各国における人身取引に関する中央および地方の仕組みと課題が率直に話されました。



高岩参事官補

今回のワークショップには日本からお二人の短期専門家に来ていただきました。日本政府の人身取引対策の要である内閣官房からは、高岩直樹参事

官補が来て下さり日本における人身取引の実情や政府の取組みをデータに基づき説明されました。



吉田弁護士

また、10数年日本で人身取引に取り組んでこられた吉田容子弁護士には、日本における人身取引事例をあげながら、弁護士の立場から見た日本における人身取引課題についての経験を共有していただきました。

JICAはメコン地域の国々で人身取引に関する支援を行うために関係国で調査を実施していますが、日本の取り組みや状況を伝える取り組みは行ってきていませんでした。各国の参加者は、今回、このような形で日本の取り組みを知ることができたことを喜び、講義に大変興味深く聞き入っていました。一方、タイからは既に2回も本邦研修として日本に派遣してきたので、日本の実情を知る人が増えており、質問に対して、タイのMDTメンバーが日本の取り組みについて追加説明する場面も見られ、知日派の層が厚くなっていることに、プロジェク

トの成果が現れていることを実感しました。



第1日目の夜には懇親会が開催され、長期シェルターに滞在し

ている子どもたちによる楽器の演奏やダンスが披露され、参加者もお国自慢の歌を聴かせるなど、昼間とは違った形で交流を深めることができました。このような場面を通じて生まれる人間的なネットワークの構築が、今後の地域レベルの活動に役立つに違いないと思います。

最終日の長期シェルター視察では女性用と男性用の長期シェルターを視察しました。各国からの参加者は、タイ政府の出費により立派な外国人被害者保護施設が運営されていることに深く印象付けられたようで、予算や人員配置など運営面についても興味を持ったようでした。

毎回のことながら、海外からの参加者を招いてのワークショップの開催に当たっては、準備と当日の運営に多くの時間と人手と資金を要します。最大の難関は言葉です。今回は英語を基本言語とし、カンボジア語、ミャンマー語、ベトナム語、タイ語、日本語の5カ国語の同時通訳を配置しました。例えばカンボジア語で報告・質問すると、英語⇒カンボジア語になるという経路です。しかし日本

語の場合は、日本語→タイ語の通訳だったため、日本語⇒タイ語⇒英語⇒各国語の順序で訳され、また質問も同じ順序で伝えられるので、質問と回答にもかなりの時間を要しました。

また、当日の運営に関しては、BATWCスタッフなど多くの人の協力が欠かせませんでした。今回は第2回目のためか、準備や当日の運営の手順が非常にスムーズでした。事前にスタッフなど主だった関係者20数名を集めて説明会を行い、BATWCの部長自ら、ワークショップの目的、各人の役割、当日の動きにいたるまでの細かな指示をされたことも、スタッフのコミットメントを引き出すのに力があつたものと思えます。このように、BATWCの多くのスタッフが準備および当日の運営に関わってくれたことで、プロジェクトの今年度最大の行事を成し遂げることができ、相手国機関とのパー



タイ MDT メンバーと

トナーシップが一層強化されたことを喜ばしく思います。